

ふーぬ風

発行 〒901-1115
沖縄県南部農業改良普及センター
TEL : (098) 889-3515
FAX : (098) 835-6010

平成28年度 沖縄県指導農業士・女性農業士 認定者紹介



平成28年9月12日に沖縄県庁にて沖縄県農業士等の認定式が行われ、南部地区から指導農業士2人、女性農業士1名が認定されました。今後も地域農業のリーダー、農業青年や新規就農者の指導者としての活躍が期待されます。



指導農業士
第313号
【金城 寿】

豊見城 (トマト・マンゴー)
JA おきなわ豊見城支店にて、野菜生産部会長を務めています。就農して16年、組織活動に積極的に参加し、トマトやマンゴー産地の発展に努めてきました。今後も、地域活性化に励みます。



指導農業士
第314号
【當 銘 博】

豊見城 (トマト)
JA おきなわ豊見城支店にて、トマト共選部会長を務めています。太陽熱土壌消毒を実施し、栽培管理を徹底することで、単収増加を行っています。担い手育成にも関心があるので、頑張りたいです。



女性農業士
第160号
【山城 弘美】

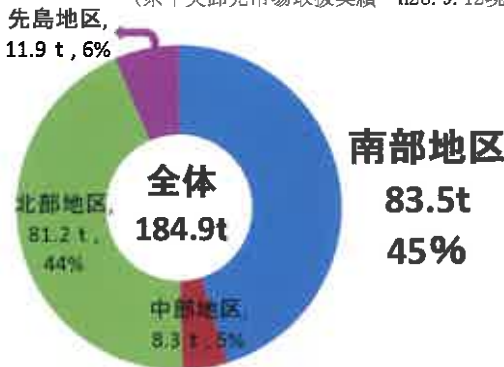
糸満 (小ギク・トルコギキョウ)
就農して約20年、経営主として、家族のサポートを受けながら頑張ってきました。部会役員や地域自治体役員を長年にわたって務め、今後は、女性農業士として、地域活動や営農に励んでいきたいです。

マンゴー栽培管理

～来期の安定生産・高品質果実生産に向けて～

マンゴー生産者の皆様、今期の生産・出荷お疲れ様でした。今年の県中央卸売市場における南部地区出荷実績は、図1のとおり取扱い総量184.9tで、その内45%の83.5t余が南部産で占められています。

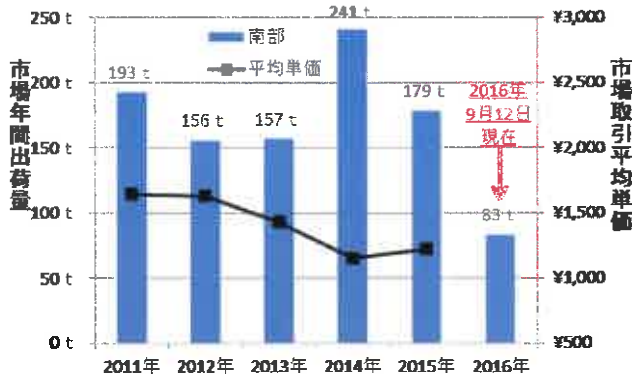
図1 平成28年産アーウィン入荷実績
(県中央卸売市場取扱実績 H28.9.12現在)



今期のマンゴーは、昨年秋口の高温による花芽分化(花数)の低下と年明けの低温による開花遅れ、梅雨期前後には高温により小玉傾向となり、過去5年平均(185ト)の45%に留まる結果となりました。(図2)

図2 南部地区5年間の出荷実績比較

(資料：県中央卸売市場年報)



来期の安定生産・品質向上に向け、以下の点に気をつけていきましょう。

①結果母枝の充実

収穫後の8月から10月頃までは、新梢が発生して樹の樹勢が回復し、次年度の着果枝となる大切な期間です。収穫後の施肥と枝の整理、新梢を加害する病虫害防除を行い、結果母枝の充実を図りましょう。

②誘引

11月以降は、新梢の発生が止まり、花芽分化期へ移行します。葉への受光確保と樹冠内部への風通し、花・実吊りを考慮し、枝の誘引を行いましょう。

③花芽分化期の温度管理とビニール被覆のタイミング

次期着果量を左右する花芽分化期(12～2月)は、樹園地内を涼しく、灌水量はやや少なめとし、花芽分化を促しましょう。また、花への病害防止として行うビニール被覆が早いと、花芽分化が不十分となり、結果母枝が花芽から新梢へ移行することがあります。結果母枝からの出蕾が7割ほど確認された時点でビニール被覆を行いましょう。



加温は芽が膨らんだ枝が園全体の7割になってから始めます！

④受粉昆虫の導入と温度の確保

1月から2月にかけての開花期は、受粉昆虫の働きが重要になってきます。受粉昆虫の準備は事前に行いましょう。また、受粉昆虫の増殖・活動時期は加温又は保温に努め、ハウス内の温度確保と受粉昆虫の導入・飼養により受精率の向上に努めましょう。

⑤花吊り・摘果・玉吊り・袋かけ

3月から6月にかけて順次、花房に光がよく当たるように花吊りを行います。摘果は、生理落下後の荒摘果(2～3果)、仕上げ摘果(1～2果)を順次行い、肥大促進に努めましょう。果実は、光が十分に当たるよう樹体の上方へ吊り上げるとともに梅雨前後からの日焼け対策のため果実袋の利用や白ネット等での遮熱対策を行いましょう。

⑥病虫害防除

果実品質向上のため、スリップス、ハダニ、炭そ病、軸腐れ病の防除に努めましょう。

軸腐れ病発症枝



スリップス被害葉と成虫



ハダニ成虫及び卵



ヒラズハナアザミウマの成虫

冬春期のゴーヤー栽培のポイント（病害編）

ゴーヤーの促成（冬春期）栽培において、単収を増やすには、病虫害の発生を抑え、収穫期間を延ばす事が重要です。今回は、ゴーヤーの重要病害であるニガウリうどんこ病の防除について紹介します。

ニガウリうどんこ病は糸状菌（カビ）が引き起こします（写真1）。

- （病 状） 初期：葉にはじめ黄色のほぼ円形の斑点ができる
 中期：次第に初期の黄色斑点が広がり、
 病斑上に白色のカビができる
 後期：葉全体が黄化し、枯れる
- （発病条件） ○高温で乾燥している時 ○多湿で日照不足の時
 ○窒素肥料が多い時 ○草勢が弱い時



写真1. ニガウリうどんこ病
 （葉表面の白いカビ：中期）

ニガウリうどんこ病の防除法（対策）としては、

- ◎施設内は、日当たり、風通しを良くするため、「下葉・老葉・病葉」を摘葉し、施設外に出す。
- ◎湿度調整のため、敷草を敷く。◎窒素肥料をやりすぎない。等があります。

さらに、「発病初期に硫黄粉剤の定期散布」は、高い予防効果があります（写真2～4、図1）。



写真2. 硫黄粉剤散布機材（散粉散粒機、ゴーグル、マスク）



写真3. 硫黄粉剤の散布



写真4. 硫黄粉剤散布に適した葉（病状初期）

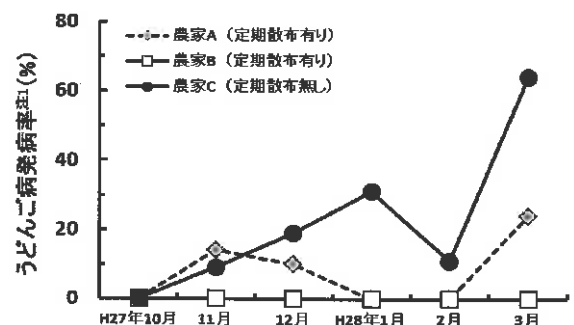


図1. 硫黄粉剤定期散布によるニガウリうどんこ病防除効果
 注1) うどんこ病発病率(%) = 発病葉 / 100葉 × 100
 注2) いずれの農家も発病が進んだ場合は登録農薬(液剤)による防除を実施

硫黄粉剤は、発病初期（写真4）から、定期的（10～14日おき）に散布することで、発病を抑制することができます。昨年度、南部地域において、硫黄粉剤を定期散布した農家は、散布しなかった農家に比べ、ニガウリうどんこ病の発病率は低く（図1）、硫黄粉剤によるビニール等の極端な劣化は確認されませんでした。硫黄粉剤の使用に際しては、注意事項を確認の上使用してください。

さあ、牧草地の更新をしましょう。



養牛農家の皆さん、今年の夏は暑かったですね。那覇および久米島では6～8月の平均気温が観測史上最高の29.2℃となり、平年に比べて1.1℃高かったそうです。一方、降水量は平年並みで、草の良く穫れた夏だったのではないのでしょうか。年月が経過して生産性の低下した牧草地は更新をして、栄養豊富で安全な自給飼料をたっぷりと牛に食べさせましょう。

更新の目安：①最高収量時の70%以下の収量になった場合 ②雑草の占める面積（被度）が30%以上になった場合。

草種の選択：圃場の保水力や排水性、利用方法（青刈り、サイレージ、乾草）、圃場周辺環境などの条件に応じて、栽培に適するものを県奨励品種の中から選ぶ。

基肥：品種毎の栽培基準に基づいて堆肥および化学肥料（窒素、リン酸、カリ）を施用する。

除草：更新後に雑草が発芽してくることがないように、耕起前に除草剤を散布して枯殺する。

その他留意点：播種後の少雨等のリスクにも対応できるように、一度に多くの面積を更新しないこと。初めて栽培する草種の場合には特に慎重に更新する。

沖縄県おすすめ牧草（奨励品種）の紹介

①さちあおば（イタリアンライグラス）

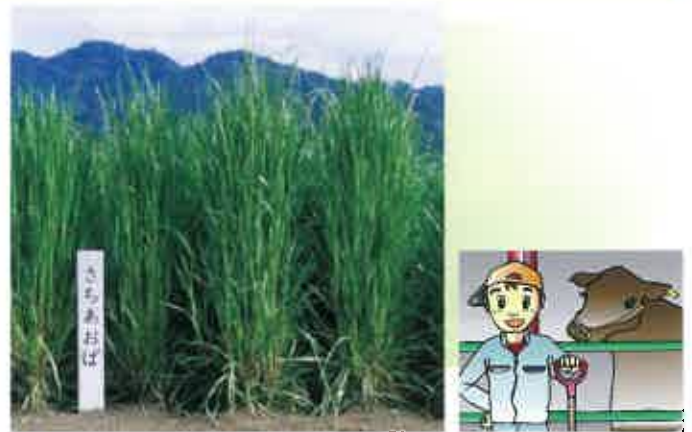
分類：1年生イネ科牧草
特性：10月中旬に播種すれば2番草を3月に収穫できる。初期生育に優れる。嗜好性が良い。

留意点：栽培後は速やかに夏作牧草へ切り換える

播種時期：10月下旬～11月

収穫時期：12月下旬～3月下旬（冬作用牧草）

期待生草収量：6トン／300坪（10a）



②うーまく（ギニアグラス）



分類：多年生イネ科牧草
特性：極多収（ガットンの1.4倍程度）
消化率が高い。11月まで出穂しないので品質が低下しにくい。干ばつに強い。耐倒伏性にも優れる。

留意点：過湿土壤には適さない。草高が高くなるので、120～140cmで刈り取る。

播種時期：3月～5月 **収穫時期**：3月～12月

期待生草収量：16トン／300坪（10a）

スマホで右のQRコードをスキャンすると、この草種についての詳しい情報が見られます

<http://souchi.lin.gr.jp/seed/pdf/29umaku.pdf>

（地域特産振興班 細井 伸浩）





「人と環境にやさしい」農業始めませんか

日頃、実施されている栽培管理の一つ一つについて、『この作業法(仕方)って、生産物や畑・周辺環境、作業する自分自身にとって、問題になること(リスク)は無いか。』を考えてみましょう。

あなたならどう答えますか??

例えば・・・



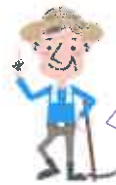
肥料の量は、
どうやって
決めてる?



毎年、
ちゃんと
同じ量を
あげてるよ



人は年とっても若い頃と同じ量を食べ続けたら、太るさ〜ね。
人間が健康診断を受けるように、畑も土壌検診を受けて、その時々合った施肥量にしないと「メタボ」になるかも。雨が降ったら川や海、地下水に流れて自然や飲み水を汚すよ〜。



農薬は
どうやって
散布する?



病気や害虫、
雑草も
発生したら
ちゃんと
農薬を散布
してるよ



病気も害虫も雑草も、普通に農業してたら毎年発生しないね〜?
病気や害虫が発生しにくい環境づくりや発生前の予防剤の利用は、結果的に農薬の量を減らして被害を減らすことになるよ。



あなたの
スイカは、
安全・安心?



農業歴60年
わんの
スイカは
いつても
安全・安心
やさ!



お子さんやお孫さん、消費者に「ワンの経験」を語ってもなかなか理解されません…。
例えば、圃場毎に管理簿を作って肥料や農薬の使用履歴を記録しておけば、いつでも説明できますね!



ここ数年、
農作業中に
事故やケガ
はない?



農業機械は
俺の手足
片眼つぶつ
ても運転で
きるよ!
大ケガした
ことないよ



事故やケガの主な原因は「慣れ」です!
これまでの経験は大変心強いけど、作業前点検や作業前の屈伸など日頃から「無事故」「ケガ無し」を意識しましょう!
事故やケガが起こった際の対応法も家族でキチンと話し合っておこう!



梅雨時期や
片降り、台風
など大雨も
多いけど、
畑の土は
守ってる?



大雨は
ワンの責任
じゃないわ
ちゃ〜ん
ならんわ
が…。



休耕(休作)期間が長い時は、縁肥などを植え付け、畑の表面を裸(裸地)にしないことで土が流れにくくなりますよ。また、畑に傾斜がある場合、低い方の縁にグリーンベルト(ベチベルや月桃等)を植えると、畑の外に流れ出るのを抑えますよ。

GAPとは、【Good Agricultural Practice】の略で、一般的には『よい農業の実践』です。
農業は、人の生活に不可欠な衣食の糧を生産する、人が生きていく上でなくてはならない大事な産業。
農家は、その大事な産業である農業を営むことにより生計を立てている、農産物の生産責任者です。

ウチアタイしたそこのあなた!!
まずは、今の状況を確認してみませんか。
ご希望であれば、普及センターでお調べ(現地確認)致します。
農産物の生産責任者としてのプライドを持って、リスク管理も忘れずに!!



興味のある方は、お気軽に普及センターまでお電話下さい。
子供達のためにもGAPに取り組んで作物や環境、働く自分達にも優しい、持続型農業を実践しましょう!!

南部地区園芸振興推進協議会活動として 「園芸産地活動事例報告」を行いました!

8月30日(火)南風原町立中央公民館大ホールにおいて、南部管内の農業者や関係機関を対象に、産地リーダーや新たな担い手育成等の課題や情報の共有及びネットワークを広げることを目的とした「なんぶ担い手意見交換会」が開催されました。今回、南部地区園芸振興推進協議会も共催し、I部において「園芸産地活動事例報告」を行いました。

野菜、花き、果樹の各品目から、話題提供していただきました!

【野菜】「沖縄県南部地域におけるIPM(総合的病害虫管理)の取り組みについて」と題して、南部普及センターの崎山主任技師より、近年、農薬に耐性をもった害虫の発生等により、生物農薬(天敵製剤)を中心とした新たな病害虫防除体系の構築が必要となってきたと話しがありました。八重瀬町、南城市、糸満市等では、JA部会の勉強会が開催されるなど、今後は天敵の放飼前後の技術支援や土着天敵(地域にもともといる天敵)の活用も視野に入れてIPMの取り組みを進めていく、と報告がありました。



◀ミナミキイロアザミウマを食べる天敵スワルスキーカブリダニ



土着天敵タバコカスミカメ▶



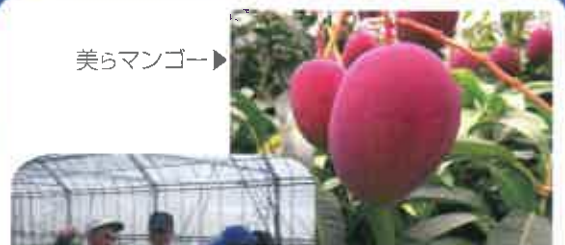
◀ポレロホワイト



定植作業▶

【花き】「トルコギキョウの生産拡大に向けた取り組み」と題して、JAおきなわ南部地区営農振興センターの花弁指導課赤嶺課長より、栽培面積が増加するなか、栽培技術と秀品率の向上のため、品種選定から土づくり、栽培ステージごとの勉強会や現地検討会など部会活動の報告がありました。また、生産者、関係機関を網羅した南部地区トルコギキョウ産地協議会やJA組織の連携した活動に加え、担い手の育成の取り組みについて紹介がありました。

【果樹】「南部『美らマンゴー』生産への取り組み」と題して、JAおきなわ南部地区営農振興センターの野菜果実指導課寄川指導員より、JAマンゴー専門部会の活動紹介がありました。最高級「美らマンゴー(糖度15度以上、果実重460g以上、果実全体が紅い果実)」の生産増に向け、産地目標「2・2・2運動(収量2t、A品率20%、加温栽培による全体2割の前進出荷!)」を掲げ、支部ごとの現地検討会や樹づくりコンテストの開催、販促活動など組織が一体となった取り組みの成果報告がありました。



美らマンゴー▶



◀農家によるほ場評価

南大東村かぼちゃ産地協議会の活動取組み

◇現状と課題

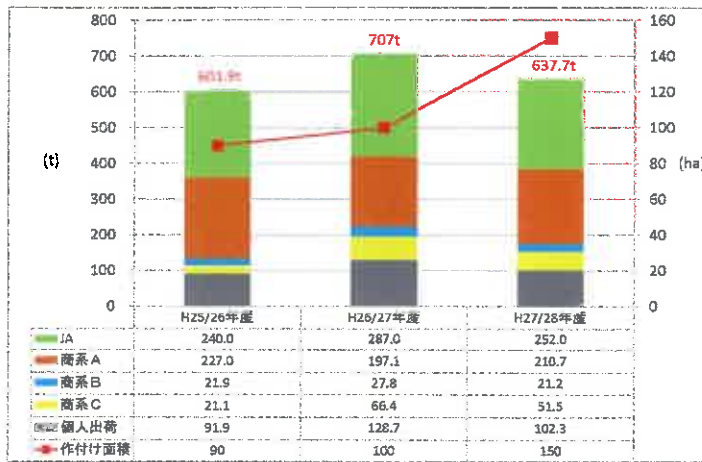


図1. 出荷量及び栽培面積の推移 (村港湾課調べ)

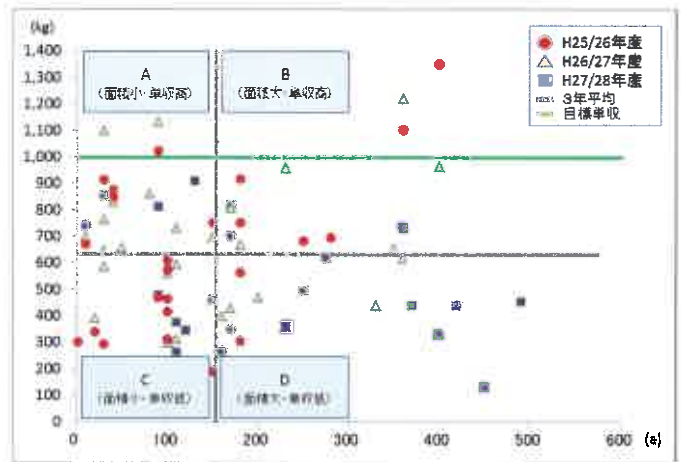


図2. 一戸あたりの経営面積と単収の散布図 (JA実績)

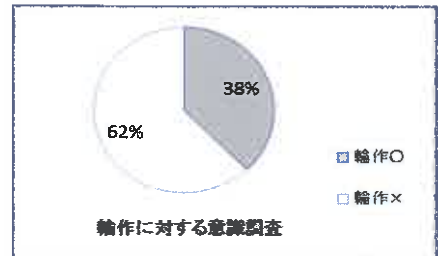
近年、さとうきびの不作が続く中、台風端境期に栽培できるカボチャの出荷量及び栽培面積が急激に伸びています(図1)。そのため、船舶輸送の滞貨問題やさとうきびの安定生産に向けた作付面積の整合性などの課題があります。また、出荷形態が多様化していることから、産地化に向けた取組みが必要となっています。

またカボチャ農家間の栽培技術のバラツキや一戸あたりの経営面積の増加に伴い、単収が低くなっている傾向がみられます(図2)。今後は、栽培技術の平準化や労働力に見合った経営面積の提案が必要となっています。

◆対策



○調査結果



産地協議会を主体に、土壌分析の周知徹底や講習会及び現地検討会の開催を行い、収量・品質の向上を図っています。また船舶輸送滞貨対策のための計画出荷調整の検討やブランド化に向けた目揃い会の検討など、産地が抱える課題について話し合いを行っています。

またアンケートによる実態調査から、カボチャほ場の固定化要因や輪作に対する意識の高さを把握することができました。これを踏まえ、さとうきびとの輪作事例を調査し、輪作推進を図る必要があります。

八重瀬町かんしょ産地を支える永井則義さん

千葉県出身の永井則義さんが農業を志したのは20代の頃、JA 北海道に勤務していた経験からで、その想いを実現させるため周年を通して作物の栽培が可能な沖縄県に移住し就農しました。平成20年に移住した当初は八重瀬町でサヤインゲン、オクラ等を栽培していましたが、規模が拡大するにつれ人件費がかかるようになったため品目変更を決断したそうです。

現在は約12,000坪の面積でかんしょ栽培に取り組み、輪作作物としてカボチャ、ジャガイモ、大根を栽培しています。八重瀬町は昔からかんしょ栽培が盛んな地域ですが、近年は施設園芸品目が増加し、かんしょ栽培が経営の主軸となっている農家が減っています。そのような中、永井さんは機械化できる作物で台風に強く、単価が安定しているかんしょに魅力を感じ栽培に取り組んでいます。品種はちゅら恋紅中心で、約8割は加工用として販売し、残りは青果用として直売所等で販売しています。

かんしょ栽培の課題として、連作ができないため輪作作物の選定に苦慮しているようで、先輩農家や関係機関との交流

を通して技術の習得や情報収集に努めています。今後は輪作体系を確立した上で、面積を拡大し収益の向上を目指していると抱負を語ってくれました。技術、経営面で自由度の高い農業は楽しいですと笑顔で語る永井さん、八重瀬町のかんしょ産地を支える担い手として今後の活躍が期待されます。



(普及企画班 仲本 優子)

沖縄県唯一の豊見城市饒波地区トマト産地で 長年栽培を営むトマト生産農家

～長嶺保弘(67歳)・マサエ(65歳)夫妻～



写真：豊見城市饒波地区トマト産地



写真：トマト生産農家「長嶺夫妻」

那覇空港に向かう高速道路を豊見城市に入ると左上に饒波岳を見上げ、その反対の右下には大きく開けた饒波地区のハウス団地があります。これは県内最大のまとまったトマト団地でこの地区でトマト生産に励む長嶺夫妻を紹介します。現在の経営概況は、トマト栽培が33a、マンゴー栽培も33aです。トマト栽培の23a(71%)は2人の息子に栽培を任せており、担い手づくりをしっかりと行って、今後はマンゴー生産を中心にがんばります。長年の饒波地区のトマト栽培に夫婦ともに携わってきた「トマト栽培の功労者」です。

(園芸技術普及班 金城 寛秋)